

# 土木遺産を狙う 鉄橋や転車台

ローカル線が  
行く



仙台駅と山形駅を結ぶJR仙山線は奥羽山脈を東西に貫く。山ふところにある熊ヶ根鉄橋は高さ51.4m。仙台市青葉区に住む後藤光亀さん(61)は、鉄橋下の広瀬川に胴長を着て入り、カメラを構える。

後藤さんは鉄道マニアではない。東北大学大学院准教授であり、土木学会の選奨土木遺産選考委員。優れた土木施設を遺産に選ぶメンバーだ。

けたをやぐら状に組んだ「トレススル橋」。コンクリートの橋がなかった1910年ごろまでが全盛期だった。「西部劇に登場するから外国のもの」と思っている人もいるが、身近なところ

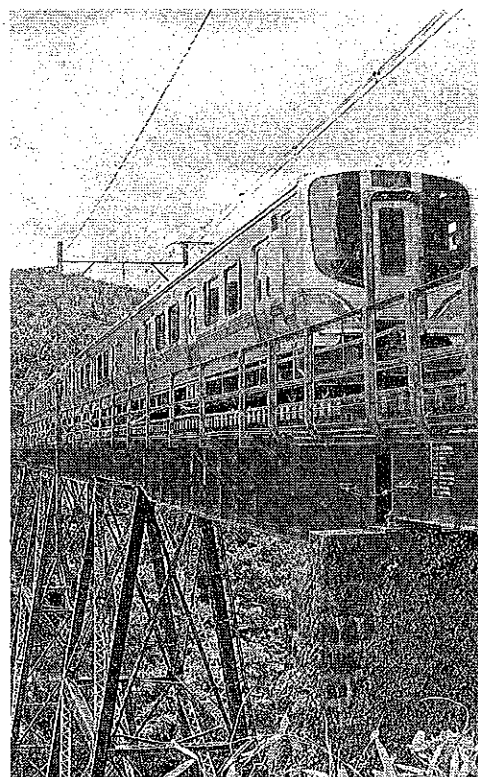
るにもあるんですよ。山陰線の旧余部鉄橋が取り壊されたいま、現役の後藤さん根拠は貴重。後藤さんの撮影は、選考作業に備えるためだ。「列車が写っていないと、迫力が欠ける」土木遺産の候補には、仙山線から熊ヶ根鉄橋のほか、奥羽山脈を貫く面白山トンネルや、転車台も挙げられている。転車台は蒸気機関車(SL)の方向を変え

るのに欠かせない施設。作並駅と山形駅の構内に残る。いずれも土に覆われてはつきりしなかったが、山寺駅では数年前、地元有志が手入れを始めた。仙山線は来年、「交流電化試験開始60周年」という節目を迎える。鉄道に電車を走らせるには、動力に電

気を使う「電化」が欠かせないが、直流通電化は変電所があちこちに。そこで交流電化を進めようと、1950年代に当時の国鉄が仙山線で試験に取り組み、これに成功。東海道新幹線を交流で開業させる基礎を築いた。土木遺産



山寺駅に残る転車台の前で、土木遺産の大切さについて語る後藤さん＝山形市



熊ヶ根鉄橋を渡る仙山線の電車＝仙台市青葉区、岸幸利さん提供

## 芭蕉ゆかりの山寺温泉もすぐそこ

への認定はこのタイミングを狙っており、沿線住民と勉強会を重ねている。7月28日、「仙山線の魅力語る会」が山形市の山

休日のお昼前、普通列車。4両編成の座席で仙台駅から山形駅に向

る。仙台駅と山形駅の62.8kmを結ぶ。快速と普通が走る。仙台駅近くはベッドタウン化が著しく、近年、東照宮や北山など5駅が開業した。山形市内の信号機器室で7月20日に火事があり、作並駅―山形駅は同26日まで運休したが、復旧した。



仙山線は厳密には羽前千歳駅までだが、奥羽線に乗り入れ、約6kmの山形駅まで行く。線路が二つ並んでいるので普通の複線のように見えるが、線路の幅が違ふ。狭いほうを仙山線などが走り、広いほうを山形新幹線が走る。春に花見客でにぎわう霞城公園が見えてくると、変化に富んだ約1時間半の旅も終わりがた。

作並温泉の玄関口である作並駅から約20分先の山寺駅までが、仙山線のハイライトだ。木々の豊かな緑に覆われた渓流が、眼下に現れては消える。山寺駅で多くの乗客が降りた。俳人松尾芭蕉も立ち寄った立石寺をめざすのだらう。

れいている。4人連れの女性たちは、発車を待ちかねていたように弁当を広げた。しばらくはマンションが目立つベッドタウン。大学もたくさんあり、人口が増えている。新しい駅が次々にできていく。その一つ、東北福祉大前駅と国見駅の間の車窓から、市街地の先に太平洋を望めると聞いた。目をこらしたが、雨が降り出しそうな空模様のため視界がきかず、確かめられなかった。

(目野克美)